



甲
第
十
六
卷

リ 5
16
3



伊5
 號 16
 卷 3

國史攬要卷之三

○村上天皇

諱ハ成明

醍醐天皇第十四ノ皇子ニシテ先帝ノ同母弟ナリ○天

慶九年四月天皇太極殿ニ於テ即位年二十一太政大臣

忠平庶政ヲ關白ス○天曆元年參議藤原忠文卒ス忠文

征東ノ命下ル片方ニ食ヲ箸ヲ投シテ起テ節刀ヲ受テ

直チニ發ス宿直コトニ厩馬ヲ側ニ繫キ其芻ヲ啗ムヲ

聞テ眠ヲ警ム其豪爽此ノ如シ○三年八月關白忠平薨



國史攬要

卷三

村上天皇

ス貞信ト謚ス、忠平兄時平仲平ト並ヒニ大政ヲ執ル、世
之ヲ三平ト稱ス、○五年、和歌所ヲ置キ、左近衛少將伊尹
ヲ以テ別當ト為ス、○六年八月、太上天皇崩ス、朱雀院ト
稱ス、天皇院ヲ稱スル此ニ始ル、○八年、菅原文時封直ヲ
上リテ三事ヲ條陳ス、賣官ヲ停メ、奢侈ヲ禁シ、遠人ヲ懷
久、帝皆嘉納ス、文時ハ道真ノ孫ナリ、博學文ヲ能ス、帝嘗
テ内宴ヲ設ケ、文人ヲ召テ詩ヲ賦ス、帝ノ作先成リ頗ル
自負ス、文時ノ詩成ルニ及テ甚佳ナリ、文時ニ命シテ其
優劣ヲ評セシム、文時曰聖製固ヨリ優レリ、帝強テ問フ、
文時曰臣カ作實ハ聖製ニ上ルコト一等ト、乃チ逃レ出ツ

帝益々歎賞ス、○天德二年、鎮守府將軍經基卒ス、清和帝
ノ第六子、姓源ヲ賜ヒ世々將帥ニ任ス、○四年三月、清涼
殿ニ御シ和歌ヲ鬪ハス、禁中歌合セノ會此ニ始ル、○九
月、禁中火アリ、歷代ノ重器文帙多ク亡フ、神鏡ヲ灰燼中
ニ獲タリ形質損セス、○康保二年、朱雀院ニ幸シ、文臣四
十人ヲ召シテ詩ヲ獻セシメ親ク之ヲ試ム、○四年五月
廿五日、天皇崩ス、壽四十二、帝寬恕ニシテ恩ニ偏倚ナシ
嘗テ侍臣ニ問フ、外議朕ヲ以テ如何ナル主ト為ス、對テ
曰久、皆寬ト稱ス、帝曰、是朕カ志ナリ、又嘗テ一老吏ヲ召
テ問テ曰久、當今ト延喜ト孰レカ優レル、曰、異ナルコト無

シ、帝頗リニ之ヲ問フ、曰賤吏何ヲカ知シ、唯主殿寮多ク
 燎燭ヲ進メ、率分堂ノ前ニ草ヲ生ス、前代ト少ク異ル耳
 ト、劇務夜ニ至リ、歳貢少ナキヲ謂フナリ、帝愧ル色アリ、
 是ヨリ益々治ヲ勵ス、帝源延光ヲ信任ス、已ニシテ疎シ
 ス、延光懼レテ朝セス、俄ニ召テ曰、學生藤原雅材甚々文
 才アリ、何ヲ以テ薦メサル、延光恐謝シ、速ニ雅材ヲ奏シ
 テ藏人ト為ス、橘直幹文章博士タル、十七年兼ル所ナシ、
 故吏ニ文章博士必ス他官ヲ兼ヌ、乃チ自ラ上疏シテ貪
 困ヲ訴ス、帝覽テ悅バズ、篋瓢屢空、草滋頽凋之甚、云々ノ
 句ニ至リ、歎シテ曰ク、一代ノ文士ナリ、窮此ニ至ル朕カ

過ナリト、即口民部大輔ニ任ス、直幹ノ疏小野道風之ヲ
 書ス、詞書兩絶ナルヲ以テ甚々愛玩ス、後ニ禁中火アル
 氏、問テ曰、直幹カ疏恙カ無キカト、其學ヲ好ミオヲ愛ス
 ル此ノ如シ、後ノ治ヲ謂フ者必ス延喜天曆ヲ稱ス、

○冷泉天皇 諱ハ憲平

村上天皇第二ノ皇子ナリ、母ハ中宮藤原氏、○十月、天皇
 紫宸殿ニ於テ即位、天皇疾アリ、太極殿ニ御スル、能ハ
 ズ、時ニ年十八、太政大臣實賴庶政ヲ關白ス、○初メ帝東
 宮ニ在テ病アリ、皇弟為平親王ハ、先帝ノ愛スル所ニシ
 テ、其妃ハ源高明ノ女ナリ、先帝為平親王ヲ以テ帝ノ儲

貳ト為ント欲ス、諸藤原氏其源氏ト婚スルヲ以テ之ヲ
沮ム、是ニ至テ實賴遺詔ト稱シテ皇弟守平親王ヲ以テ
皇太弟ト為ス、高明望ヲ失フ、○安和二年三月、左馬頭源
滿仲等變ヲ上テ曰、左大臣高明密カニ橘繁延等ト為平
親王ヲ奉シ亂ヲ作ニテ謀ルト、帝之ヲ信セス、右大臣
師尹等急ニ兵ヲ遣テ高明ノ第ヲ圍ミ、貶シテ太宰權帥
ト為シ、繁延及ヒ藤原千晴、僧蓮茂等ヲ遠謫ス、中外騷擾
スルヲ天慶ノ亂ノ如シ、或ハ云フ、師尹帝ニ高明ヲ忌ミ、
事ニ因テ之ヲ除キ其位ニ代ニト欲ス、故ニ滿仲ヲシテ
誣告セシム、高明實ニ及スルニ非ス、親王悞レテ疑ヲ削

ントス、帝之ヲ止ム、○八月、天皇位ヲ皇太弟ニ禪ル、寛弘
八年十一月廿四日崩ス、壽六十二、帝心疾アリ即位ニ及
テ増劇シ、政權ミナ外戚ニ歸シ、朝廷ノ衰フル是ヨリ始
マル、

○圓融天皇 諱ハ守平

冷泉天皇ノ同母弟ナリ、○九月、天皇大極殿ニ於テ即位
年十一、實賴攝政タルヲ故ノ如シ、○天祿元年五月、攝政
實賴薨ス、清慎ト謚ス、右大臣伊尹攝政タリ、○冬、左大臣
在衡薨ス、在衡恪勤ヲ以テ稱セラレ、高明ノ貶セラレ、
在衡聞テ歎惜ス、家臣慶シテ曰、主公其位ニ代ラニ在衡

怒テ之ヲ逐フ、朝スル毎ニ車中ニ昏ヲ看ル、顧問ヲ承ルニ及テ必ス其昏中ノ事ナリ、故ニ帝之ヲ寵信ス、○二年、太宰權帥源高明ヲ召還ス、○三年冬、攝政伊尹、薨ス、謙徳ト謚ス、權中納言兼通超遷シテ内大臣ト為リ、宣旨ヲ内覽ス、初メ兼通ノ妹村上帝ノ中宮タリ、兼通密カニ其手書ヲ請フテ曰、攝關闕ルコトアラハ、兄弟次第ニ相及スヘシ、等ヲ躐ユ可ラスト、時ニ弟兼家已レニ超テ大納言タリ、兼通常ニ缺望シ、屢々朝參ヲ欠ク、兄伊尹薨スルニ及テ、問ニ衆シ中宮ノ手昏ヲ以テ帝ニ呈ス、帝内ニ入ニテ欲ス、兼通其裾ヲ捉テ之ヲ請フ、帝母后ノ手跡ヲ見テ、愴

然トシト戚容アリ、遂ニ超遷シテ内大臣ト為ス、是ヨリ兄弟隙アリ、○天延二年、兼通請テ關白ト為リ、牛車ヲ賜フ、威權日々熾ナリ、邸ヲ堀川ニ構ヘ、宮闕ニ僭擬シ、土木ノ壯麗ヲ極ム、謗ル者アレハ法ヲ以テ之ヲ罪ス、道路目ヲ以テシ關白ノ口ハ虎口ヨリ猛ナリト云ニ至ル、兼家ト嫌隙益々甚ク、朝臣ノ兼家ノ第ニ至ル者必ス夜ヲ以テス、○貞元二年、四月、左大臣兼明ヲ親王ト為ス、時ニ兼通政ヲ專ニシ、從兄頼忠ヲ左大臣ト為シ、ト欲シ、兼明カ疾アルコトヲ誣奏シ、策シテ親王ト為ス、陽ニ之ヲ尊テ、實ハ其權ヲ奪フナリ、兼明ハ醍醐帝ノ第二子、帝ノ叔父タ

リ、姓源ヲ賜ヘ才學ヲ以テ稱セラル、親王不平ニ堪ヘス
居ヲ龜山ニトシ菟裘ノ賦ヲ作テ之ヲ譏ル、○十一月太
政大臣兼通薨ス、兼通疾劇シ兼家之ヲ聞テ曰、吾代テ關
白タラント速カニ入朝ス、兼通ノ門者喝道ノ聲ヲ聞テ
通シテ曰、久大將來ルト、兼通喜テ以為ラク來テ病ヲ問
フト、席ヲ拂テ之ヲ俟ツ、車聲門ヲ過テ入ラス直ニ朝參
ス、兼通大ニ怒リ疾ヲカメテ入朝ス、兼家は見愕避、兼通
意色殊ニ惡ク直ニ奏シテ曰、臣今日最後ノ除日ヲ行ハ
ント、乃チ頼忠ヲ關白ト為シ兼家カ官ヲ奪ヒ、從弟濟時
ヲ以テ之ニ代ス、奏シ畢テ第二歸ル即チ薨ス、○天元五

年、京師盜多ク火ヲ放テ人ヲ劫ス、先是諸國海賊大ニ起
リ調庸ノ路梗ス、是ニ至テ滋々甚シ、○能登守源順卒ス、
順ハ嵯峨帝四代ノ孫ナリ、才學有テ沉滯ス、無尾牛歌ヲ
作テ懷ヲ述ス、帝之ヲ憐ミ能登守ニ任ス、三年ニシテ卒
ス、和名抄ヲ著ス、○永觀二年、八月、天皇位ヲ皇太弟ニ禪
ル、帝ノ末年紀綱大ニ紊レ、盜賊横行シ行人ヲ掠奪ス、京
師尤甚シク火ヲ禁内ニ放ツ者三タヒ、朝士宮ニ入テ盜
ヲ為スニ至ル、大権下ニ移ルヲ以テナリ、正曆二年二月
十二日崩ス、壽三十三、

○華山天皇 諱ハ師貞

冷泉天皇第一ノ皇子ナリ、母ハ贈皇太后藤原氏。○十月、
天皇太極殿ニ於テ即位、年十七、頼忠庶政ヲ關白ス、左右
大臣故ノ如シ。○十二月、詔シテ直言ヲ求ム、圓融帝ノ末
朝政廢弛シ、紀綱壞亂ス、帝位ニ即ニ及テ、權中納言藤原
義懷ヨシカネ左中辨藤原惟成ユキナリノ二人心ヲ協セ、機務ヲ參決シ、彈
正大弼大江匡衡ユキヒラ侍読タリ、帝精ヲ勵シ、治ヲ圖リ、紀綱稍
ク張り、盜賊屏息ス、先是太宰府ニ私ニカヲ帶ル者多シ、
帝即位ノ後、僅ニ十日、府中カヲ帶ル者ナシ。○寛和元年、
七月、女御祇子ニギハヤギ卒ス、帝ノ寵スル所、悼念已マス。○二年六
月、帝位ヲ遜レ、華山寺ニ入ル、初メ右大臣兼家、藤原義懷

カ外舅ノ親ヲ以テ朝政ニ預ルヲ嫉ミ、帝ヲシテ早ク位
ヲ讓ランメント欲シ、多方之ヲ謀ル、會々帝ノ寵妃祇子
亡シ、帝追慕シテ已マス、頗ル迷亂ス、其子道兼左少辨ト
ナリ、左右ニ親近シ、黠ニシテ智アリ、兼家之ニ計ヲ授ク、
道兼僧嚴久ト佛經ヲ講シ、無常ヲ説キ、位ヲ太リ身ヲ捨
ン、トヲ勸メ、且曰、臣モ亦奉從セン、帝遂ニ意ヲ決シ、夜ニ
乘シテ潜ニ宮ヲ出ントス、時ニ月色方ニ明ナリ、帝少ク
猶豫ス、道兼之ヲ促シテ曰ク、劍壘已ニ東宮ニ奉ス、復タ
止ム可カラス、遂ニ華山元慶寺ニ入ル、僧嚴久ゴウキウ從テ厥明
落飾ス、道兼佯テ曰、家ニ還テ父母ニ辭シ、而シテ給事セ

ント乃チ去リ復タ來ラス、帝始テ其譎詐ヲ知テ憤怒ス、
天文博士安部晴明乾象ニ變アルヲ察シ、急ニ入テ之ヲ
奏スレヒ及ハス、宮中始テ帝ノ不在ヲ知テ大ニ驚ク、義
懷惟成馳テ寺ニ至リ相視テ失聲シ、亦披剃シテ僧トナ
ル、帝是ヨリ戒ヲ持シ歷游苦ヲ極メ、寛弘五年二月八日
崩ス、壽四十一、

○一條天皇 諱ハ懷仁

圓融天皇第一ノ皇子ナリ、母ハ女御藤原氏、○七月、天皇
太極殿ニ於テ即位、甫テ七歳、右大臣兼家攝政タリ、兼家
初メ兼通ノ為ニ貶セラレ快々樂マス、賴忠奏シテ右大

臣ト為ス、已ニシテ其女宮ニ入テ帝ヲ生ム、因テ華山帝
ヲシテ位ヲ去ラシメ立帝是ニ於テ大ニ志ヲ得テ朝政
ヲ專ニス、○賴忠ノ關白ヲ罷ム、兼家三宮ニ準シ位三公
ノ上ニ在リ、○永延元年二月、僧裔然宋ヨリ還ル、裔然宋
ニ在テ太宗ヲ見ル、太宗我國ノ皇統一系臣下モ亦世祿
ナルヲ聞テ大ニ嘆賞ス、○九月、中務卿兼明親王薨ス、親
王雄才博學、名當時ニ冠タリ、兼通カ為ニ忌マレ、其志
ヲ展ルコトヲ得ス、快々樂スシテ薨ス、年七十四、帝後ニ學
ヲ好ミ兼明ノ子ヲ召テ其遺物ヲ問フ、乃チ菟裘賦ヲ獻
ス、帝之ヲ覽テ扶桑豈無影乎、浮雲掩忽昏シ、叢蘭豈不芳

乎、秋風吹先破ル、ノ句ニ至テ、其抑鬱ヲ憐ミ帝モ亦心ニ
感スル所アリ、親クニ句ヲ書シテ巾箱ニ藏ム、帝崩スル
後關白道長臥内ニ入り之ヲ見テ惡ミ手ツカラ之ヲ裂
クト云、○二年、攝政兼家カニ條京極ノ第成ル、美ヲ盡シ
奢ヲ極ム、大ニ百官ヲ招テ宴ヲ設ク、源頼光馬三十四ヲ
以テ賓客ニ分チ贈ル人皆駭ク、宴集ノ威ナル從前未ダ
有ラサル所ナリ、○正暦元年、帝元服ヲ加フ、秋關白兼家
薨ス、先是兼家カ京極ノ邸怪多シ、乃チ捨テ寺ト為シ法
興院ト稱ス、兼家亦疑ヲ削テ法興院關白ト稱ス、相家ノ
院號此ニ始ル、兼家ノ子道隆攝政タリ、○二年、皇太后薨

ヲ削テ東三條院ト號ス、女院ノ號此ニ始ル、○四年、菅原
道真ニ太政大臣正一位ヲ贈ル、○長徳元年、右大臣道兼
ヲ以テ關白ト為ス、在職僅ニ七日ニシテ薨ス、世ニ七日
關白ト稱ス、初メ道兼父ニ切アルヲ以テ常ニ關白ヲ望
ム、兼家職ヲ道隆ニ讓ルニ及テ意甚不平、父ノ喪ニ居テ
戚容ナク日々客ヲ會シ宴飲游嬉ス、時人ノ之ヲ謗ル、○権
大納言道長ニ敕シテ太政官ノ文書ヲ内覽セシム、尋テ
右大臣ト為ル、道長ハ兼家ノ季子ナリ、豪邁ニシテ才略
アリ、少時相者アリ視テ曰、虎深山ニ歩スルノ表、貴顯比
ナシト、兼家嘗テ藤原公任ノ人ト為リヲ羨ミ、諸子ヲ勵

シテ曰、吾カ兒皆及ハスト諸兄默シテ答ヘス、道長獨リ
 對ヘテ曰、小子固ヨリ其影ヲ蹈フ能ハス、或ハ其面ヲ踏
 ニト、○二年、復内大臣伊周イカ罪アリ大宰大貳ニ貶セラレ、
 弟中納言隆家出雲権守ニ貶セラレ、明年大赦ニ逢テ召
 シ還サル、伊周ハ道隆ノ子叔父道長ト協ハス、其左遷ノ
 時大江以言コト從テ太宰府ニ在リ、詩ヲ作テ道長ノ專權ヲ
 譏テ云、鷹鳩不變三春眼、鹿馬應迷二世情、道長聞テ之ヲ
 啣ム、後ニ帝以言ヲ擢用セントス、道長之ヲ沮テ曰、斯人
 鹿馬ノ詩ヲ作ル者ナリ、帝乃チ止ム、○長保二年二月、道
 長ノ女彰子ヲ以テ中宮ト為ス、彰子生レテ豐艷駿ノ長

甘身ヲ過ク、道長殊ニ之ヲ愛シ、其入内ニ及テ裝奩玩具
 巧工ヲ極メ、侍女數十人皆一時ノ才色ヲ選ム、紫式部和
 泉式部尤モ才名アリ、和泉式部ハ大江雅致ノ女、行多
 シ、紫式部ハ越前守為時ノ女中宮ノ師タリ、嘗テ賀茂齋
 院イハシ選子内親王ノ為ニ源氏物語ヲ選テ上ル、道長其才色
 ヲ悦ビ、之ニ私セント欲ス、式部拒テ從ハス、○寛弘二年
 冬、禁中火アリ、先是長保三年災ス、其間僅ニ六年、○六年
 秋、具平親王薨ス、親王ハ村上帝ノ皇子、英敏ニシテ材藝
 多シ、世ニ兼明親王ト並ヒ稱シ、前後中倉王ト言フ、嘗テ
 御製ノ詩ヲ和ス曰、忽戴君王還、自耻風聲猶減、漢東平ノ

句アリ、薨ス年四十五、帝甚悼惜ス。○八年、帝不豫ナリ、位ヲ皇太子ニ禪ル、尋テ六月廿二日崩ス、壽三十二、帝性慈仁、嘗テ延喜帝ニ例テ寒夜衣ヲ脱シ、窮民ノ苦ヲ察ス、當時人才亦多シ、源經信、藤原公任、源俊賢、藤原行成、才藝ヲ以テ並ヒニ中納言ニ任ス、世之ヲ四納言ト稱ス、宮媛ノ秀亦數十人アリ、清少納言、紫式部、赤染衛門、和泉式部、伊勢大輔、小式部内侍ノ流ナリ、帝嘗テ雪朝宮中ニ坐シ、左右ヲ顧テ曰、香爐、茶、雪ト、少納言即チ起テ簾ヲ捲ク、帝其敏才ヲ賞ス、白居易ノ詩ニ香爐、峰、雪、撥、簾、看、人、清、氏、之ヲ知ルナリ、帝嘗テ曰、朕不徳ナリ、唯人ヲ得ルハ延喜天

曆ニ愧スト、然レ道長権ヲ專ニシ、政宸衷ニ出テ、帝之ヲ惡ムト、雖レ氏制スルヲ能ハス、
○三條天皇 諱ハ居貞
冷泉天皇第二ノ皇子也、母ハ贈皇太后藤原氏、兼家ノ女、
○十月、天皇太極殿ニ於テ即位、年三十六、道長大政官ノ文春ヲ知ル故ノ如シ、○長和元年、大江匡衡卒ス、匡衡文學ヲ以テ著ル、然レ沉滯身ヲ終ス、年六十一、其妻赤染衛門、道長ノ妻ノ侍女タリ、昏ヲ著シテ藤原氏ノ盛事ヲ叙ス、榮華物語ト曰フ、○帝目疾劇シク朝ヲ視ルヲ能ハス、道長數ク諷シテ位ヲ讓ラシム、帝悦ハス、十一月、禁中火

三條 十一

アリ徒テ批把第二御ス、道長医官ヲシテ金液丹ヲ進メシム、帝遂ニ明ヲ失フ、○五年正月、帝位ヲ皇太子ニ禪ル、寛仁元年、五月九日崩ス、壽四十二、

○後一條天皇

諱ハ敦成

一條天皇第二ノ皇子也、母ハ上東門院、藤原氏、道長ノ女、○二月、天皇太極殿ニ於テ即位、甫テ九歳、左大臣道長政ヲ攝ス、○寛仁元年、三月、道長攝政ヲ罷メ其子頼通ヲ以テ攝政トス、左右大臣ニ位ス、○秋八月、皇太子敦明ヲ廢シ、敦良親王ヲ立テ皇太弟ト為ス、初メ三條帝ノ位ヲ禪ル、道長敦良親王ヲ以テ帝ノ儲貳ト為シト請フ、三條帝

聽カス、遂ニ敦明親王ヲ立ツ、時ニ帝ヨリ長スルヲ十四歳、長幼序ヲ失ヒ且ツ道長ノ意ニ非ス、三條法皇崩スルニ及テ在廷ノ臣皆道長ヲ畏レテ東宮ニ至ル者ナシ、東宮ノ官属モ肯テ職ニ供セス、門廷寂然タリ、太子堪ルヲ能ハス位ヲ逃レント欲シ、道長ノ子能信ヲ召テ其情ヲ告ク、道長聞テ大ニ喜ヒ、速カニ奏シテ之ヲ廢ス、太子ノ母堀河太后之ヲ聞テ驚キ、往テ視レハ及ハス、相持シテ號泣ス、道長之ヲ患ヘ且物議ヲ憚リ、奏シテ小一條院ト號ス、上皇ニ準シテ封戸舊ノ如クス、且其女ヲ納テ太子ノ妃ト為シ之ヲ慰ス、太子ノ故ノ妃ハ左大臣顯光ノ女

ナリ、家ニ歸リ憂憤シテ死ス、父顯光之ヲ哭シ、一タニシテ髮盡ク白シ、○治安元年、伊豫守源賴光卒ス、賴光英武ニシテ射ヲ善クス、將畧ヲ以テ稱セラレ、○萬壽四年春、京師盜多シ、禁中ニ入テ物ヲ奪フ、○十二月、前攝政道長薨ス、道長樞機ヲ典ル、四十餘年、一家三后ヲ出シ、子ハ攝關ト為リ、政柄已レニ歸シ、黜陟心ニ任セ、富ミ王室ニ過ク、外戚ノ盛ナル古來比ナシ、世御堂關白ト稱ス、○長元四年、平忠常反シ、誅ニ伏ス、忠常初メ下總介ニ任ス、長元元年、亂ヲ作シテ安房守惟忠ヲ殺ス、朝廷將ヲ遣テ之ヲ討ツ、克タス、是ニ至テ甲斐守賴信ニ敕シ、坂東ノ兵ヲ

率テ之ヲ討シム、忠常湖ニ臨テ壘ヲ列シ、悉ク舟船ヲ奪フ、賴信至ル、涉ル、一ヲ得ス、乃チ衆ヲ集テ攻戰ヲ議ス、皆曰、船無キヲ奈何ニ、賴信曰、吾嘗テ湖中ニ淺所アルヲ聞クト、乃チ軍中ニ募ル、果シテ知ル者アリ、潜ニ先ツ渡ラシメ葦ヲ立テ標ト為シ、全軍流ヲ亂テ進ム、忠常大ニ驚キ戰ハスシテ降ル、賊相謂テ曰、吾徒此地ニ生レテ其津ヲ知ス、將軍始テ來テ之ヲ知ル、何ソ神ナル、賴信忠常ヲ擒ニシテ京ニ還ル、忠常途ニ死ス、其首ヲ斬テ之ヲ獻ス、賴信ヲ從四位上ニ叙シ、上野常陸介ト為ス、○九年、四月十七日、天皇崩ス、壽二十九、

○後朱雀天皇 諱ハ敦良

後一條天皇ノ同母弟ナリ、○七月、天皇太極殿ニ於テ即位、年二十八、左大臣賴通關白故ノ如シ、○長曆三年、禁中火アリ、帝徙テ京極院ニ御ス、○長久元年、京師盜賊多シ、弓箭ヲ帶テ人ヲ殺シ火ヲ縱ツ、又群僧アリ行人ヲ殺掠ス、○秋、京極院火アリ、神鏡災ニ罹ル、○三年、十二月、去年禁宮成テ還御ス、是月復タ災ス、帝徙テ一條院ニ御ス、已ニシテ一條院又タ火アリ、東三條院ニ御ス、○寛徳二年、正月、帝疾篤シ、位ヲ皇太子ニ讓ル、十八日崩ス、壽三十七、帝嚴峻ニシテ心ヲ政事ニ留ム、然レ賴通ノ專權ヲ以テ

施為スルヲ能ハス、世以テ憾トナス、帝已ニ位ヲ皇太子ニ禪リ、尊仁親王ヲ以テ新帝ノ儲貳ト為ントシ、賴通ヲ召テ之ヲ命ス、尊仁親王ハ藤原氏ノ所生ニ非ス故ヲ以テ賴通之ヲ立ルヲ欲セス、乃チ對テ曰、事未タ晚カラスト、賴通退ク弟能信御床ニ近イテ奏シテ曰、陛下ニ立宮ヲ以テ孰レノ僧ニ附セントス、帝曰、朕之ヲ東宮ニ立ント欲ス何ソ僧ニ附センヤ、能信曰、然ラハ則チ早ク決スヘシ、今日ヲ過ス可ラス、帝悟ル、即日ニ立テ、皇太弟ト為シ、能信ヲ以テ東宮大夫ト為ス、親王ハ則チ後三條帝ナリ、後遂ニ藤原氏ノ權ヲ奪フ、

○後冷泉天皇 諱ハ親仁

先帝ノ太子ナリ、母ハ贈皇太后藤原氏、道長ノ第四女。○四月、天皇太極殿ニ於テ即位、年二十一、頼通闕白タル。故ノ如シ。○永承元年、正月、右大臣藤原實資薨ス、實資剛直ニシテ操行アリ、道長ノ專權ニ當テ朝臣阿附セサル者ナシ、實資獨リ侃然トシテ朝ニ立チ、天子倚頼ス、上東門院ノ入内スルヤ、道長一時ノ名流ニ乞テ和歌ノ屏風ヲ作ル、中納言公任キントウ選首タリ、華山法皇モ亦タ御製アリ、實資獨リ拒テ曰、安ソ身公卿ニ列シテ女御ノ姿装ヲ為ス者アラシヤ、後一條帝嘗テ凶夢アリ、或人佛經ヲ誦セ

ンヲ勸ム、實資之ヲ止メテ曰、陛下唯己レヲ正フシテ政ヲ修メハ、百邪モ犯ス。能ハス、嘗テ新邸ニ移ル會ク火ヲ失ス、衆人來リ救フ、實資之ヲ止メ、唯一笛ヲ携ヘ徐カニ車ニ駕シテ出ツ、其曠達亦タ此ノ如シ、世ニ賢右府ト稱ス、其日録ヲ小右記ト曰フ、○二年、權中納言チキナ頭基薨ス、顯基後一條帝ノ恩遇ヲ受ク、帝崩スル後、髮ヲ削テ大原ニ隱ル、疽ヲ患フ喜テ曰、癰疽ハ死ニ至ル迄心氣亂レスト、醫藥ヲ用ヒスシテ薨ス、蓋シ濁世ヲ厭フト云、○天喜四年八月、陸奥酋長安部頼時ヨリトキ叛ク、頼時祖父忠頼ノ時ヨリ世々陸奥ノ酋長タリ、頼時ニ至テ勢益々強大、遂ニ

六郡ヲ略シ、西白川關ヲ界シ東率土濱ニ至リ、其中央衣川ノ險ニ據リ、海陸ノ利ヲ擅ニシテ貢賦ヲ輸セス、兵ヲ出シテ四モニ侵掠ス、國守之ヲ制スルヲ能ハス、朝廷乃チ源賴義ヲ以テ陸奥守鎮守府將軍ト為シテ之ヲ討ツ、會々大赦アリ其罪ヲ赦ス、賴時大ニ悦ヒ、駿馬金寶ヲ以テ之ニ贈ル、已ニシテ其子貞任夜藤原光貞ノ營ヲ侵シ、人馬ヲ殺傷ス、其婚ヲ求テ得ケルヲ怨ムナリ、賴義乃チ貞任ヲ救ヘテ斬ントス、賴時曰人誰カ妻子ヲ愛セザラシ、命ヲ拒ムモ亦タ妻子ノ為ノミト、闕ヲ閉テ復タ叛ク、是ヨリ連戰決セス、○五年春、賴義安部富忠ヲ招キ降シ、

伏ヲ設ケテ賴時ト戰ヒ大ニ之ヲ破ル、賴時流矢ニ中テ死ス、貞任餘衆ヲ聚メテ河崎柵ヲ守ル、勢猶盛ナリ、○冬、賴義兵千八百ヲ率テ河崎柵ヲ攻ム、時ニ大風雪軍中食ヲ絶チ、人馬疲労ス、官軍大ニ敗レ、僅ニ六騎ヲ餘ス、賊左右ノ翼ヲ張テ圍ミ攻ム、矢下ルヲ雨ノ如シ、賴義ノ子、義家驍勇絶倫ニシテ騎射神ノ如シ、連射シテ賊帥ヲ斃ス、賊兵披キ靡ク、大ニ驚テ曰、八幡太郎ナリト、遂ニ圍ヲ解テ退ク、○先是歲、荐^{シキ}リニ飢エ糧食給セス、賴義兵食ヲ朝廷ニ請ヘ、比至ラス、乃チ援ヲ出羽ノ國守源齊賴ニ請フ、齊賴援ヒス相持スルヲ數歲、貞任ノ勢益々張ル、○康平

元年春、禁中火アリ。同二年、一條院火アリ、帝彼テ頼道カ
 三條第二御ス、京師賊多シ、屢々火ヲ皇居ニ放ツ。○五年、
 安部貞任誅ニ伏ス、先是朝廷源頼義カ任滿ルヲ以テ高
 階經重ヲ遣テ之ニ代フ、兵民皆頼義ノ威風ニ服シテ、經
 重ノ指揮ヲ受ス、經重遂ニ京師ニ歸ル、頼義意ヲ銳ニシ
 テ賊ヲ討ツ、使ヲ遣テ出羽ノ豪族清原武則ヲ諭ス、武則
 即チ萬餘人ヲ以テ來リ屬ス、兵勢大ニ振ル、頼義軍ヲ會
 シ分テ七陣トナシ、進テ小松柵ヲ破ル、貞任逆ヘ戰テ大
 ニ敗レ、走テ衣川柵ヲ保ツ、頼義進ミ擊テ之ヲ破リ、遂ニ
 追擊シテ鳥海柵ヲ拔ク、貞任退テ厨川柵ニ據ル、柵河ヲ

阻テ澤ニ據リ、壘ヲ高シ、塹ヲ深クシ、守備甚ク固シ、官軍
 之ヲ攻ム、賊沸湯ヲ澆キ、矢石ヲ發シ、殺傷數百人、頼義命
 シテ屋ヲ毀チ、塹ヲ埋メ、草ヲ積ムト山ノ如クシ、手ニ火
 ヲ執テ京師ヲ遙拝シ、神火ト號シテ之ヲ縱ツ、會々風大
 ニ起リ、烟焰樓櫓ヲ掩ヒ、壘柵皆火ヲリ、官軍從テ圍ム、賊
 軍大ニ亂ル、武則等擊テ之ヲ鏖ス、貞任單騎ニシテ陣ヲ
 衝ク、官軍叢刺シテ之ヲ斃ス、其子千代童亦々健闘シテ
 擒ニ就ク、貞任時二年三十四、身ノ長六尺餘、腰圍七尺四
 寸、楯ヲ以テ尻ヲ載セ、六人之ヲ昇テ至ル、其黨重任、家任
 經清等悉ク誅ニ伏シ、貞任ノ弟宗任則任等降ル、餘黨悉

ク平ラク、○六年春、源賴義及ヒ義家、義綱、清原武則等カ
功ヲ賞シ、官爵ヲ進ムルヲ差アリ、○七年春、賴義降虜ヲ
以テ京師ニ至ル、東征九年ニシテ賊ヲ平ケ、凡ソ十一年
ニシテ始テ京ニ歸ル、○治曆三年、十月、賴通カ宇治ノ別
荘ニ行幸ス、賴通ノ請フ所ナリ、其荘綺麗ヲ極ム、○四年
四月十九日、天皇賀陽院ニ崩ス、壽四十四、

○後三條天皇

諱ハ尊仁

後朱雀天皇第二ノ皇子也、母ハ陽明門院、三條帝ノ皇女、
○七月、天皇太政官廳ニ於テ即位、年三十五、關白教通左
右大臣故ノ如シ、帝東宮ニ在ル、二十四年、學ヲ好ミ、國

家ノ故事ヲ究習ス、已ニ即位群下肅然タリ、初メ帝七歳、
宮ニ入テ後朱雀帝ニ謁ス、進退度アリ、觀ル者嘆美セ、
ル、無シ、帝之ヲ愛シ立テ、後冷泉帝ノ儲貳ト為ス、尚
方ニ壺切ノ劔アリ、東宮ニ傳ルノ例ナリ、賴通肯セスシ
テ曰、太子タリト雖、氏藤原氏ノ出ニ非レハ傳フ可ラス、
帝之ヲ聞テ曰、吾何ソ此一劔ヲ用ンヤト、時ニ帝孤立シ
テ中外ニ援ナシ、人皆之ヲ危フム會、罪人アリ宮側ニ
匿ル、吏來テ之ヲ圍ミ、宮中驚擾ス、帝神色自若タリ、人或
ハ儲位ノ變有ントヲ疑フ、相者アリ謂テ曰、太子龍質ナ
リ誰カ揺スヲ得ン、先是藤原氏互ニ奢侈ヲ競ヒ、賴通

高陽院ヲ造ル甚タ壯麗ナリ、教通二條ノ第ヲ造ル更ニ
美ヲ盡ス、賴通悦ハス之ヲ師實ニ言フ師實曰、吾カ族ノ
為ス所天下誰カ之ヲ議セント、帝ノ位ニ即クニ及テ皆
畏テ奢侈ヲ禁ス、賴通ハ宇治ニ屏居シテ政事ニ與カラ
ス、教通關白タリト雖モ眞ニ備ルノミ、○延久元年春、石
清水ノ太廟ニ幸ス、時ニ風俗奢侈ニ趨ク、帝其弊ヲ改シ
ト欲シ、乘輿鹵薄ヲ省減シ、都人士女ノ拜觀スル者、車ニ
金飾アレハ命シテ之ヲ剔去ル、貴族ト雖モ許サズ、後賀
茂廟ニ謁ス、復タ金飾ノ車ヲ見ス、○冬、始テ記録所ヲ置
テ民間ノ訟訴ヲ聽斷ス、且ツ權貴ノ莊園ヲ占テ民害ヲ

為ス者ヲ檢ス、○四年秋、沽價ノ法ヲ定メ、又斗升ノ法ヲ
定ム、帝量制ヲ審ニセント欲シ、藏人頭藤原資仲ニ命シ
テ新ニ之ヲ作ラシム、親ク御簾ノ竹ヲ抽キ截テ準ト為
ス、成ルニ及テ小舎人ニ命シ、殿庭ノ砂ヲ量テ之ヲ試ミ、
資仲再ヒ穀倉院ノ米ヲ取テ之ヲ量ル、後世遵用シテ宣
旨升ト稱ス、○十二月、天皇不豫ナリ、位ヲ皇太子ニ禪ル、
帝剛健嚴明、學ヲ好テ古今ニ涉リ、初メ東宮ニ在テ世故
ヲ經歷シ、藤原氏ノ專權ヲ憤ル、位ニ即ニ及テ抑ヘテ其
權ヲ奪ヘ、大ニ紀綱ヲ張ル、右大臣師房ハ具平親王ノ子
ナリ、帝最之ヲ重シ、輦車宮門ニ入ルヲ許シ、源資仲ハ實

資ノ孫ナリ、剛直祖風アリ、大江匡房才學ヲ以テシ源經
信強敏ヲ以テ並ビニ參議ニ任ス、帝嘗テ源隆國ノ無禮
ヲ恚ル、而シテ其子隆俊隆綱俊明ノ才略ヲ賞シテ之ヲ
登用ス、其人才ヲ愛スル此ノ如シ、帝位ヲ禪リ院中ニ政
ヲ決セント欲ス、明年五月七日遂ニ崩ス、壽四十一、關白
頼通嘆惜シテ曰、我國ノ不幸斯ヨリ大ナルハ莫シ大江
匡房亦稱シテ曰、隆ヲ兼和延喜ニ比ス可シ、令ニ至ル迄
稱シテ中興ノ英主ト為ス、

○白河天皇

諱ハ貞仁

先帝第一ノ皇子也、母ハ贈皇太后藤原氏、○十二月、天皇

太極殿ニ於テ即位、藤原教通關白故ノ如シ、時ニ帝年二
十、先帝ノ訓ヲ奉シテ親ク政ヲ聽ク、大臣権ヲ專ニスル
一能ハス、○承保元年、二月、前關白頼通薨ス、頼通驕恣父
ニ過キ同族互ニ奢侈ヲ覽フ、後三條帝立ツニ及テ宇治
ニ屏居シテ薨ス、年八十三、○二年、教通薨ス、師實關白タ
リ、○三年十月、帝大井河ニ幸ス、詩歌管絃ノ三舟ヲ分チ、
諸臣各其能ニ隨テ乘ス、權中納言經信後レテ至ル、舟已
ニ中流ニ出以、經信汀ニ跪テ呼テ曰、三舟擇フ所ナシ、請
棹ヲ廻ラセ、人其兼達ヲ賞ス、或ハ云、圓融帝ノ時此游ア
リ中納言公任三舟ニ乘スト、○承曆四年、高麗國王ノ夫

人疾アリ、使者ヲ遣ハシテ我良医丹波稚忠ヲ請入、廷議
遂ニ遣ラス、大江匡房答旨ヲ作ル。○永保元年、十月、石清
水ニ幸ス、源義家ニ敕シテ扈從セシム、先是園城寺ノ僧
徒延曆寺ノ僧ト屢々相闘フ、敕使ヲ遣テ之ヲ禁ス、僧徒
敕ヲ奉セス、於是義家ノ威名有ヲ以テ道途ヲ護セシム、
○二年、前鎮守府將軍源頼義卒ス、頼義ハ頼信ノ子、沉勇
ニシテ將帥ノ畧アリ、阪東ノ將士皆心ヲ歸ス、○應徳三
年、十一月、天皇位ヲ皇太子ニ禪ル、帝畧度弘大ニシテ到
決果斷、政宸衷ヨリ出テ相門手ヲ歛ム、頗ル後三條帝ノ
風アリ、然レ愛憎意ニ任セ、屢々營造ヲ事トシ、國用窘窮

ス、財ヲ納ル、者ハ國司ニ任シ、父子三四人並ト任スル
者アルニ至ル、遜位ノ後、院中ニ在テ政ヲ聽ク者四十餘
年、凡ソ院宣ヲ以テ天下ニ號令シ、別當北面ヲ置ク、此
ニ始ル、嘗テ曰、天下朕カ命ヲ用ヒサル者ナシ、惟意ノ如
クナラサル者ハ、鴨河ノ水、雙陸ノ采、山法師ノミ、篤ク佛
法ヲ信シ、佛像ヲ製シ、佛塔ヲ造ル、擧テ數ヲ可ラス、時ニ
上下華麗ヲ競ヒ、侈靡ノ風此ニ至テ極ル、崇徳天皇ノ大
治四年、七月七日崩ス、壽七十七、

○堀河天皇

諱ハ善仁

先帝第二ノ皇子也、母ハ中宮藤原氏、○十一月、天皇太極

殿ニ於テ即位甫テ八歳師實攝政タリ、政上皇ニ出ツ○
寛治元年、出羽ノ酋清原武衡タケヒライエヒラ家衡イヱヒラ亂ヲ作ス、陸奥守源義
家討テ之ヲ平ラク、初ノ清原武則貞任ヲ討ツノ功ヲ以
テ鎮守府將軍ト為ル、其孫真衡マコトヒラ相繼テ領シ、勢益々強盛、
真衡ノ弟ニ家衡清衡ノ二人アリ、皆之ニ臣事ス、出羽ノ
人吉茂秀武ヨシヒコヒデタケ事ヲ以テ真衡ニ背ク、真衡往テ之ヲ伐ツ、秀
武潜カニ二弟ヲ誘テ其虚ヲ襲ハシム、於是二弟ト隙アリ、
義家陸奥守ト為ツテ至ルニ及テ真衡迎テ之ヲ饗シ、
又往テ秀武ヲ伐ツ、二弟復々來リ襲フ、義家拒テ之ヲ却
ク、清衡降リ家衡屈セス、義家乃チ往テ家衡ヲ攻ム、克々

ス、其叔父武衡曰、義家ヲ卻ク家衡何ソ壯ナルト、往テ之
ヲ援ケ、金澤ノ柵ニ據ル、義家大ニ怒リ、兵數萬ヲ率ヒ之
ヲ攻ム、鎌倉景政カマクラノカサマ三浦為次ミヅノツグ等先登シテ切アリ、武衡險ニ
據テ死守ス、下スヲ能ハス、會々其弟義光京師ヨリ來ル、
義家大ニ喜フ、義家又々勇怯ノ兩席ヲ設テ、士ヲ饗シ、戰
切ヲ勵マス、義光ノ從臣藤原秀方ヒデカタ三軍ニ冠タリ、毎ニ
勇席ニ列ス、時ニ秀武降テ我軍ニアリ、策ヲ進メ、長圍ヲ
築テ之ヲ困ム、已ニシテ柵中食竭キ、義光ニ因テ降ヲ乞
フ許サス、時ニ天漸ク寒ク、士卒凍ヲ苦ム、義家一夕令シ
テ曰、我營ヲ燒テ煖ヲ取レ、今夜賊ノ柵陷ラン、黎明果シ

シテ柵中火起リ衆皆潰ユ家衡逃レ武衡池中ニ匿ル皆
捕ヘテ之ヲ斬ル餘黨悉ク平ラク乃チ清衡ヲ押領使ト
為シ京師ニ還ル初メ義家父ニ從テ東征シ貞任ヲ平ラ
ケテ還ル嘗テ頼通ニ詰テ征戰ノ畧ヲ談ス大江匡房坐
ニ在リ退テ人ニ謂テ曰渠レ將オアリ惜カナ未タ兵法
ヲ知スト從者之ヲ告ク義家曰必ス故アラント即チ弟
子ノ禮ヲ執ル是ニ至テ金澤ノ柵ヲ攻ントス飛雁ノ行
ヲ亂ルヲ見テ曰是江師ノ教ユル所ナリ必ス伏有ント
兵ヲ分テ之ヲ圍ム果シ伏セアリ撃テ之ヲ殲ス孫子ニ
曰鳥起ル者ハ伏也ト是ナリ前役九年此役三年之ヲ前

九年後三年ノ役ト云義家捷ヲ奏シ二酋ノ首ヲ獻シ有
功ノ士ヲ賞セント請フ朝議私闘トナシテ許サズ乃チ
首ヲ途ニ棄ツ○嘉保二年六月上皇徒テ闕院ニ御シ始
テ院ノ別當ヲ置キ兵曹ヲ設ケ北面ノ士ヲ置ク宣旨ヲ
奉シテ施行シ院宣ト曰フ○延曆寺ノ僧徒數千人神輿
ヲ奉シテ闕ニ詰リ源義綱カ其徒ヲ殺ストテ嗷訴ス先
是延曆寺興福寺ノ僧徒横川或ハ金峰山僧ト數々攻鬪
シ或ハ火ヲ縱ツ朝廷制スルヲ能ハス○三年帝瘡ヲ患
フ源義家ニ敕シテ宿直セシム義家女ヲ張リ致テ鳴
ラスト三タヒ帝ノ疾立トユロニ愈ユ○康和元年夏闕

白師通薨ス年三十八師通學ヲ大江匡房ニ受ケ材能ノ
士ヲ進メ勢利ノ徒ヲ黜ク朝綱肅然タリ時ニ法皇政事
ヲ親ラシ百司門ニ闡ツ師通嘆シテ曰禪位ノ君ニシテ
宮門車ヲ聚ムルノ理有ニヤ法皇之ヲ聞テ自ラ歛ム薨
スルニ及テ益々忌憚ナシ○仁和寺ノ覺行ヲ以テ法親
王ト為ス覺行ハ白河帝ノ皇子法親王ノ號此ニ始ム○
嘉承二年七月十九日天皇崩ス壽二十九帝心ヲ政事ニ
留メ諸司ノ案奏夜ル必ス覆視シ疑フ可キ者アレハ再
ニ商議セシム嘗テ左右ニ謂テ曰普天ノ下皆王氏ナリ
遠民ハ何ソ疎シテ近民ハ何ソ親シキ一人ノ母普ク

四海ノ事ヲ聞ク一能ハス是レ大患ナリ汝等聞テ有ラ
ハ隱ス一勿レ時ニ源俊房藤原通俊大江匡房藤原季仲
等朝ニ列ス然レ政法王ニ在リ帝大ニ為ス一能ハス

○鳥羽天皇 諱ハ宗仁

先帝ノ太子ナリ母ハ贈皇太后藤原氏○十二月天皇太
極殿ニ於テ即位關白忠實攝政タリ白河法皇政ヲ院中
ニ聽ク帝甫テ五歳○天仁元年隱岐ノ派人源義親逃レ
テ出雲ニ至リ目代ヲ殺シ官物ヲ掠ム因幡守平正盛ニ
敕シテテ之ヲ誅ス義親ハ義家ノ子ナリ○八月前鎮守
府將軍源義家卒ス年六十八初ノ頼義ハ幡神ノ劔ヲ賜

ヲヲ夢ム、覺テ之ヲ異トス已ニシテ義家ヲ生ム、年八歳
元服ヲ石清水ノ社ニ加フ、因テ八幡太郎ト稱ス、初ノ奥
州ノ役ニ義家賊ヲ射ル、毎ニ弦ニ應シテ斃ル、清原武則
其弓カヲ試ント欲シ、堅甲三領ヲ疊ネ樹ニ掛ケテ、之ヲ
射ントヲ請フ、義家一發シテ三甲ヲ貫ク、武則大ニ驚テ
曰、神ナリ人ノ能スル所ニ非スト、○天永二年、十一月、權
中納言大江匡房薨ス、年七十一、匡房三朝ノ帝師タリ、音
人ヨリ匡房ニ至ル、追ハ世業ヲ繼ク、中納言宗忠嘆惜シ
テ曰、天下明鏡ヲ失フト、著ス所江家次第、江談等アリ、○
永久元年、四月、延曆寺ノ僧徒數千人、祇園神輿ヲ奉シテ

闕ニ詣リ、興福寺ノ不法ヲ訴ス、平正盛源為義等ニ命シ
テ之ヲ距ハシム、興福寺ノ僧徒數千、又延曆寺ヲ攻ント
ス、源平二氏ニ命シ、宇治ニ拒テ之ヲ卻ク、法皇使ヲ遣テ
二寺ヲ和解ス、僧徒教ヲ奉セス、○二年、京師盜多ク行人
ヲ掠劫ス、南海道海賊多シ、都鄙騷然、○元永元年、正月、女
御藤原璋子ヲ立テ、中宮ト為ス、璋子ハ大納言公實ノ
女、法皇之ヲ宮中ニ養フ、遂ニ私ス、已ニシテ帝ニ配シ、崇
德帝ヲ生ム、帝以為ラク已レカ子ニ非スト、○三年冬、右
大臣源雅實ヲ以テ太政大臣ト為ス、源氏此官ニ拜ス、此
ニ始ル、雅實質直ニシテ敢言ス、法皇之ヲ畏憚ス、父頭房

ヲ省スル毎ニ顯房亦容ヲ改ム。○保安四年正月、法皇帝
ヲシテ位ヲ皇太子ニ禪ラシム。帝時ニ年二十一、太子甫
テ五歳、帝博ク典故ニ通シ天文音律ニ精シ、遜位ノ後白
河法皇尋テ崩ス。帝亦法皇ニ例テ政ヲ院中ニ聽ク者十
八年、色ヲ好テ内嬖多シ三女院アリ、美福門院尤モ寵セ
ラレ、遂ニ亂階ヲ為ス。

○崇徳天皇 諱ハ顯仁

鳥羽天皇ノ太子也、母ハ中宮璋子藤原氏。○二月、天皇太
極殿ニ於テ即位、甫テ五歳、關白忠通攝政タリ、法皇政ヲ
院中ニ聽ク。○天治元年春、帝及ヒ法皇上皇同シク白河

ニ幸シテ花ヲ觀ル、後宮ノ嬪御攝政以下ノ公卿皆從フ、
車馬衣服ノ飾、錦綺霞ノ如シ、宴ヲ開キ歌ヲ詠シ、飲ヲ盡
シテ還御ス。○源俊賴金葉集ヲ撰テ之ヲ上ル、法皇ノ敕
ヲ奉シテ撰ム所ナリ、俊賴和歌ヲ善シ一時ノ宗師メリ、
○大治四年、山陽南海盜起ル、備前守平忠盛ニ敕シテ之
ヲ追捕ス。○六月、白河法皇崩ス、是ヨリ鳥羽上皇萬機ヲ
裁決スルヲ法皇ノ例ノ如シ。○長承元年、九月、上皇新制
十四條ヲ定ム。○長承元年、三月上皇得長壽院ヲ東山ニ
作テ成ル、平忠盛其役ヲ監ス、切ヲ以テ但馬守ニ除シ昇
殿ヲ許ス、忠盛祖貞盛以來世々武士ト為リ、此ニ至テ家

ヲ興ス、公卿其門地ヲ賤シメ、與ニ伍ヲ為ス、トヲ吐ツ、然
氏上皇益ク之ヲ寵ス、上皇寵姫アリ、祇園ノ社傍ニ居ル
屢ク幸シ、忠盛常ニ從フ、一夜微行ス、雨甚シ、忽チ鬼物ア
リ、束髮銀針ノ如ク、明滅シテ行ク、上皇忠盛ニ命シテ
之ヲ射サシム、忠盛走テ之ヲ捕フレハ、則チ一老僧、麥稗
ヲ以テ笠ニ代ヘ、燈ヲ神祠ニ奉ラントシテ、火器ヲ持シ行
ク、之ヲ吹ナリ、衆心皆安シ、上皇其膽勇ヲ賞ス、後チ其
幸スル所ノ官人、兵衛佐、局ヲ忠盛ニ賜フ、時ニ官人已ニ
姪ス、上皇曰、女ヲ生マハ、朕之ヲ取シ、男ヲ生マハ、汝之ヲ
子ト為セト、官人男ヲ生ム、清盛是レナリ、○保延元年春

頻年飢疫盜賊起ル、フ以テ詔シテ政事ノ得失ヲ言ハシ
ム、藤原敦光上昏シテ七弊ヲ陳ス、曰ク、祭祀ヲ疎ンシ、佛
ヲ信セス、農時ヲ奪ヒ、賦歛ヲ重クシ、奢僭ヲ縱ニシ、學校
ヲ廢シ、府庫ヲ虛フス、○二年冬、權大納言頼長ヲ以テ内
大臣ト為ス、○三年、左兵衛尉佐藤憲清ノリキヨ官ヲ辭シテ僧ト
為リ、名ヲ西行ト改ム、憲清博ク兵昏ニ通シ、射術ニ精シ
ク、和歌ヲ善クス、北面ノ士ト為リ、上皇ニ寵アリ、一日情
ヲ陳シ、家ニ歸テ、髮ヲ削ル、年二十三、遂ニ海内ニ周游シ、
咏歌シテ自ラ樂ム、時ニ藤原為業タケノリモ亦其弟二人ト共ニ
僧ト為リ、大原山ニ隱レ、西行ト唱和シ、大鏡オホカミヲ著ハシ、文

德帝以後十四朝ノ事ヲ記ス、論者謂ラク憲清カ文武ノ才略アルヲ、異日源賴朝ニ對ルヲ以テ知ルヘシ、而シテ位兵衛尉ニ過キス、朝廷ハ閨閣ノ私ニ殉カヒ、大臣ハ骨肉権ヲ争フ、廉耻ノ亡フル紀綱ノ壞ル、藤原氏專權ノ日ヨリモ甚シ、英武傑鷲ノ士、下僚ニ屈シテ朝廷知ラス、發シテ保元平治ノ亂ト為ル、憲清為業等蓋シ其機ヲ知ル、然レ微カヲ以テ之ヲ救フヲ能ハス、決然トシテ世ヲ遁ル、其有識ノ致ス所ト雖レ亦タ已ムヲ得サルニ出ツト云、為業ノ大鏡ヲ著ハス、以テ其志ヲ見ルヘシ、○五年八月、上皇體仁親王ヲ立テ皇太子ト為ス、上皇藤原長

實ノ女ヲ納レ尤モ寵幸ス、是ヲ美福門院ト曰フ、體仁王ハ其生ム所ナリ、故ニ上皇殊ニ之ヲ愛ス、○永治元年、十二月、天皇位ヲ皇太弟ニ禪ル、帝素ヨリ位ヲ去ルノ志ナシ、美福門院其所生ノ速ニ位ヲ得ントヲ欲シ、屢々上皇ニ逼ル、上皇乃チ帝ヲ諭シテ禪位ヲ速ニス、且ツ帝ノ詔書中ノ皇太子ヲ改テ皇太弟ト為ス、帝駭テ曰、明日審カニ當否ヲ議セント、中使往復スルヲ數次、上皇聽カス薄暮ニ及テ始テ墮ヲ傳フ、時ニ帝年二十三、太弟甫テ三歲、是ヨリ兩宮隙アリ、

○迎衛天皇 諱ハ體仁

鳥羽天皇第八ノ皇子、崇徳天皇ノ皇弟也、母ハ美福門院
得子藤原氏、○十二月、天皇太極殿ニ於テ即位甫テ三歳
關白忠通摂政タリ、鳥羽法皇政ヲ聽ク、崇徳上皇ハ與カ
ラス、○久安三年春、左大臣源有仁薨ス、始メ鳥羽上皇好
テ容儀ヲ修ス、有仁モ亦タ脩飾ヲ喜フ、朝服ニ稜アリ、鳥
帽ニ額アル、此時ヨリ始ル世ニ花園左大臣ト稱ス、○
仁平元年正月、左大臣頼長ヲシテ太政官ノ文晷ヲ内覽
セシム、其父忠實ノ請ニ從フナリ、頼長常ニ兄忠通ト協
ハス、兄弟相軋ス、而シテ忠實頼長ヲ愛シテ忠通ヲ疏ン
ス、乃チ法皇ニ請テ忠通ノ摂政ヲ頼長ニ讓ラシメント

ス、忠通其凶險用フ可ラサルヲ奏ス、故ニ法皇許サス、忠
實怒リ源為義ニ命シテ、兵ヲ遣テ忠通ノ第ニ入り、藤原
氏傳家ノ朱器臺盤ヲ奪テ頼長ニ授ケ、氏ノ長者ト為シ
因テ内覽ヲ請フ、法皇之ヲ聽ルス、於是頼長政ヲ專ニシ、忠
通虚位ニ居ル、忠通寛仁ニシテ詩歌及ヒ晷ヲ善クス、頼
長常ニ朝テ曰、是レ小技ノミ、經世ノ要務ニ非スト、毎ニ
信西等ノ諸博士ヲ會シテ、古今ヲ講論ス、然レ才ヲ負テ
驕慢ナリ、人呼テ惡左府ト為ス、○久壽二年七月廿三日、
天皇崩ス、壽十七帝在位ノ間政事ミナ法皇ニ出ツ、鬱々
疾ヲ成シテ崩ス、皇子ナシ、法皇美福門院ト議シテ、皇兄

雅仁親王ヲ立ツ、

○後白河天皇

諱ハ雅仁

鳥羽天皇第四ノ皇子ニシテ、崇徳天皇ノ同母弟ナリ。○
十月天皇太極殿ニ於テ即位、先帝崩シテ嗣無シ、崇徳上
皇以為ラク朕カ子重仁紆ヲ承クヘシト、衆モ亦々意ヲ
属ス、美福門院以為ラク先帝ノ早世ハ上皇ノ呪詛スル
ナリト、因テ重仁親王ヲ立ルヲ欲セス、乃チ法皇ニ勸
メテ帝ヲ立ツ、忠通モ亦々之ヲ愆憑ス時ニ年二十九四
ノ宮ト稱シ、微ニシテ人望ナシ、制下ルニ及テ朝野愕然
タリ。○保元元年、七月二日、鳥羽法皇崩ス、崇徳上皇入テ

臨ス、藤原惟方遣詔ト稱シ拒テ納レス、上皇大ニ怒テ宮
ニ還ル、時ニ頼長寵ヲ法皇ニ失ヒ上皇ニ諂事ス、上皇夜
レ之ヲ召シ、密カニ語テ曰、法皇當ニ立ツ可キノ重仁ヲ
立テスシテ文ニ匪ラス武ニ匪ラサルノ雅仁ヲ立テ朝
野望ミヲ失フ、朕此機會ニ乗シテ渠ヲ廢シ再ヒ位ヲ踐
ント欲ス、汝以テ如何トナス、頼長心ニ上皇ヲ立テ已レ
権ヲ專ニセンヲ望ミ喜テ之ヲ贊成ス、乃チ頼長ヲシ
テ將士ヲ召サシム、内大臣實能之ヲ聞テ固ク諫ム、上皇
聴カス、先是實能密カニ法皇ニ奏シテ、晏駕ノ後乱必ス
作シ、カ備ヲ為シテ啓ス、法皇崩スルニ臨テ一筐ヲ

以テ美福后ニ授ケテ曰、事有ラハ之ヲ啓ケト、至是上皇ノ謀已ニ洩レ、朝野洶々、后篋ヲ啓ケハ則チ武臣ノ名十人ヲ各ス、即時ニ之ヲ召シ又檢非違使ヲ分チ遣テ、兵士ノ京ニ入ル者ヲ捕フ、時ニ法皇崩シテ七日、法會ヲ田中殿ニ修ス、上皇臨マス、潜カニ鳥羽宮ヲ出テ白河北殿ニ據リ、頼長ヲ召ス、頼長間道ヨリ至リ諸將稍聚ル、又源為義ヲ召ス為義辞スレ、臣許サズ、遂ニ諸子ヲ率テ至ル、乃チ策ヲ陳シテ曰、宜ク南都ニ幸シ、宇治橋ヲ撤シテ戰フヘシ、若シ利無クシハ關東ニ奔リ、家人ヲ糾合シ、輿ヲ奉シテ關ニ從セ、臣カ方寸ニ在リト、頼長從ハス、為朝亦

夕策ヲ獻シテ曰、今夜高松殿ヲ襲ヒ、火ヲ縱テ之ヲ攻ム、善ク戰フ者ハ臣カ兄義朝一人清盛等カ如キハ臣鎧袖ヲ以テ一掃セシメ、即チ乘輿ヲ取テ陛下ヲ彼ニ奉ス、天未タ明ケサルニ事定ラシ、頼長復タ拒ンテ從ハス、為朝退テ罵テ曰、長袖ノ子豈ニ兵ヲ知ニヤ、阿兄兵機ヲ曉ル必ス我策ヲ行ハント、是夜帝徙テ東三條殿ニ御シ、文武ノ諸臣皆從フ、果シテ義朝ノ策ヲ用ヒ、夜ニ乘シテ白河殿ヲ襲フ、平清盛父子源頼政源重成平實俊平資盛等分テ諸門ヲ攻ム、為義及ヒ頼賢頼仲為宗為成平忠政等亦々分テ諸門ヲ守ル、為朝二十八騎ヲ率テ西門ニ在リ、

清盛之ヲ攻ム、為朝出テ戰フ、強弓勁箭向フ者皆斃ル、清
盛懼レテ退ク、義朝代テ進ミ大ニ鬪フ、為義賴賢等亦夕
善ク拒キ、勝敗決セス天漸ク明ク、義朝奏シテ火ヲ上風
ニ縱ツ、烟焰宮ヲ掩ヒ宮中大ニ亂ル、平家弘馳セ還テ呼
テ曰、火熾ニニシテ支ヘ難シ、乘輿速ニ宮ヲ出ツ可シ、上
皇倉黃馬ニ上リ、為義等諸將扶掖シテ如意山ニ至ル路
險ニシテ進ムヲ能ハス、上皇諸將ヲ喻シテ散シ去ラシ
メ夜ニ及テ家弘父子上皇ヲ負テ京師ニ出ツ、舍スル者
無シ、智足院ノ僧房ニ入テ湯粥ヲ進メ翌日雉鬚シテ仁
和寺ニ入ル法親王扶ヲ以テ奏ス帝乃チ兵ヲ遣テ之ヲ

衛ル、賴長走リ派矢ニ中ツテ死ス、黨與散シテ四方ニ匿
ル、少納言通憲策ヲ獻シ、叛人ノ派竄ヲ定メテ之ヲ朝堂
ニ榜ス、諸將之ヲ聞テ多ク出テ、降ル、乃チ悉ク死ヲ以
テ論ス、廷議以為ラク弘仁中ニ仲成ヲ誅セシヨリ後チ、
死刑ヲ朝臣ニ加ヘサル者、三百四十餘年、况ヤ今諒闇ニ
在テ之ヲ行フ恐ラクハ不可ナリ、通憲竊カニ奏シテ曰、
悉ク之ヲ誅スルニ非スンハ恐ラクハ後患ヲ生セント、
遂ニ家弘以下七十餘人ヲ斬ル、其子弟黨與一ツモ免ル
、者ナシ、時ニ以テ濫刑ト為ス、清盛ノ叔父忠政モ亦夕
降ル、清盛素ヨリ隙アリ乃チ之ヲ斬テ首ヲ獻シ、以テ義

朝ヲ要ス、帝果シテ義朝ニ命シテ為義ヲ誅セシム、義朝
憂懼為ス所ヲ知ラス、數々己レカ戰功ヲ以テ其命ヲ贖
ハンコフヲ請フ、帝許サス、遂ニ其臣鎌田正家ヲシテ誘ヒ
殺サシム、為朝ヲ捕テ闕ニ至ル其壯士ナルヲ以テ死一
等ヲ減シテ大島ニ流ス、遂ニ上皇ヲ讚岐ニ役シ、源重成
ヲシテ護送セシム、鳥羽ヲ過キ山陵ヲ拝セント欲ス重
成命ヲ奉セス、為朝已ニ流サル喜テ曰、朝廷吾ニ大島ヲ
賜フト、遂ニ傍迹ノ五島ヲ并セ有シ、舊臣亦夕來リ屬ス
後チ島ヲ脱シテ琉球ニ入ル、所謂舜天王ハ其子ナリト
云○二年、大内成ル役テ之ニ御ス、初ノ鳥羽帝ノ時之ヲ

修メント欲ス、其勞費ヲ憚テ果サス、是ニ至テ通憲議ヲ
決シ、五畿七道ニ敕シテ之ヲ造營ス、通憲又奏シテ記錄
所ヲ置キ、内宴及ヒ相撲節會ヲ復ス、通憲ハ文章博士兼
實ノ子ナリ、博學宏才ニシテ、事務ニ練達ス、難疑シテ信
西ト稱ス、○三年八月、天皇位ヲ皇太子ニ禪ル、帝遜位ノ
後、政ヲ院中ニ聽ク者三十餘年、然レ叛臣傍ニ在テ之ヲ
知ラス、亂逆相踵キ、武臣跋扈シ、綱紀壞乱、王室日々衰ス、
○二條天皇 諱ハ守仁
先帝第一ノ皇子也、母ハ贈皇太后藤原氏、○十二月、天皇
太極殿ニ於テ即位、右大臣基實關白タリ、上皇政ヲ院中

二聽ク、○平治元年十二月、權中納言信賴左馬頭源義朝
亂ヲ作ス、初メ信賴容姿美ナルヲ以テ寵ヲ上皇ニ受ケ、
勢ヲ恃テ驕肆、近衛大將ノ任ヲ希フ、上皇之ヲ許サント
欲ス、信西固ク諫メ退テ唐ノ安祿山ノ事蹟ヲ圖シテ之
ヲ上ル、信賴聞テ大ニ怒リ疾ト稱シテ朝セス、時ニ平清
盛姐ヲ信西ニ結ビ、勢位義朝ノ上ニ在リ、義朝心甚タ不
平ナリ、信賴因テ深ク相結納ス、權大納言藤原經宗檢非
違使別當藤原惟方亦タ信西ヲ嫉忌ス、又陰カニ相黨シ
信西ヲ除カン、一ヲ謀ル、十二月、清盛父子熊野ニ詣ル、信
賴等乃チ事ヲ舉ク、九日、白虹日ヲ貫ク、信西素ヨリ推歩

ノ術ヲ善ク、亂有シ、一ヲ察シ入テ天変ヲ奏ス、時ニ上皇
内宴アリ、乃チ宮女ニ告ケ直チニ大和ニ走ル、信賴等之
ヲ知ラス、以為ラク内宴ニ侍スト、兵ヲ率テ夜ル三條殿
ヲ圍テ之ヲ燒ク、信西在ラス、因テ其第ヲ燒キ、遂ニ上皇
ヲ御昼所ニ幽シ、帝ヲ黒戸御所ニ遷ス、信賴自ラ大臣大
將ト稱シ、官ヲ其黨ニ授ケ義朝ヲ播磨守トナス、十三日、
信西已ニ走リテ石堂山ヲ踰ントス、又星變ヲ見テ謂ラ
ク我レ免レスト、從者ヲシテ已レヲ土中ニ埋メシメ、竹
筒ヲ以テ氣ヲ通ス、信賴源光保ヲ遣テ之ヲ索ム、遂ニ土
中ニ獲テ首ヲ斬リ京師ニ梟ス、信賴詔ヲ矯メ大ニ公卿

ヲ會シ自ラ群卿ノ上ニ列ス、左衛門督藤原光賴後レテ朝ニ參議長方ニ謂テ曰、今日ノ朝班何ソ異ナルヤト、直チニ進テ信賴ノ上ニ坐ス、信賴色沮ム、光賴笏ヲ端シ聲ヲ勵シテ曰、今日旨アリテ百官ヲ召ス、議スル所何事ソト、一坐屏息シ、信賴首ヲ低レテ一語ヲ出サス、光賴回視スルコト久クシテ曰、事無クンハ退カント衣ヲ振テ出テ弟惟方及ヒ經宗ヲ召シ、其賊ニ黨スルヲ責ム、二人大ニ悔悟ス、清盛途ニ在テ變ヲ聞キ皆大ニ驚ク、清盛之ヲ避ケント欲ス、重盛奮テ曰、武臣天子ノ急ニ赴ク豈ニ片時モ緩ラス可ケンヤト、清盛意ヲ決シテ遂ニ六波羅ニ歸

リ、潜カニ人ヲ大内ニ遣リ奉迎ノ計ヲ為ス、二十六日經宗惟方モ亦タ帝ヲ勸メテ宮ヲ出テシム、帝宮人ノ服ヲ着ケ、皇后ト同ク駕シ夜々藻壁門ヨリ出ツ、重盛三百騎ヲ以テ途ニ奉迎シ、六波羅ノ第ニ奉ス、百官亦タ集ル上皇モ亦タ潜カニ仁和寺ニ入ル、信賴大ニ悵恨ス、二十七日清盛敕ヲ奉シ、其子重盛賴盛教盛等ヲ遣リ兵ヲ分ツテ大内ニ向フ、重盛待賢門ヲ攻ム、信賴喊聲ヲ聞キ怖レテ色ヲ失ヒ馬ヨリ墜ツ、義朝ノ長子義平善ク戰フ、驍騎ヲ率テ重盛ヲ撃ツ、重盛退キ走ル、賴盛等郁芳門ヲ攻ム、義朝之ヲ拒キ賴盛等亦タ敗レテ退ク、義朝勝ニ乘シ宮ヲ

空フシテ之ヲ逐フ、重盛別ニ兵千騎ヲ遣テ大内ニ入り、
 代テ諸門ヲ守ル義朝等進退據ヲ失ヒ直チニ六波羅ヲ
 攻ム清盛大ニ怖レ門ヲ闕シテ防キ守ル、義平門ヲ排シ
 テ入テ戰フ、重盛生兵ヲ以テ迭ル々拒戰ス、義朝ノ兵人
 馬皆勞レ、遂ニ大ニ敗ル、義朝東ニ支リ、信賴仁和寺ニ入
 テ哀ヲ上皇ニ求ム、上皇之ヲ宥ン^ンヲ請フ帝聽カス、平
 氏ノ兵來リ捕ヘ之ヲ斬ル、遂ニ其黨五十餘人ヲ收テ其
 官職ヲ奪ヒ、信西ノ子十二人ヲ流ス、清盛重盛等カ切ヲ
 賞シ爵ヲ進ル^ル差アリ、是ヨリ清盛ノ威權漸ク熾ン^ナ
 リ、○永曆元年正月、源義朝其下、為ニ殺サル、年三十八

義朝東ニ走ル、山門僧徒及ヒ土兵群起シテ道ヲ遮ル、皆
 破テ過キ、義平、義信等ヲ遣テ兵ヲ信濃飛彈ニ募ラシメ、
 自ラ鎌田政家、淡谷金王ヲ從ヒテ尾張ニ至リ、長田忠致
 ニ投ス、忠致ハ政家ノ舅ナリ、故ニ義朝ヲ待スル甚タ厚
 シ、已ニメ其子景致逆ヲ勸ソ、忠致遂ニ之ニ從フ、義朝關
 東ニ赴ント欲ス、忠致留テ曰、歳首ナリ三日ヲ過シテ可
 ナリト、三日ノ夕、力士ヲ浴室ニ伏セテ浴ヲ進ム、金王往
 テ浴衣ヲ取ル、力士三人入テ之ヲ刺シ殺ス、金王驚キ返
 リ直チニ三人ヲ斬ル、政家方ニ忠致ト飲ム、變ヲ聞テ駭
 キ起ツ、景致後ヨリ之ヲ斬ル、父子乃チ首ヲ京師ニ獻ス、

忠致ヲ賞シテ壹岐守ト為ス、忠致父子功ニ誇リテ失望
ス、清盛ノ家人家貞怒テ曰、父子ヲ斬テ不忠ヲ懲ラス可
シト、二人怖レテ尾張ニ還ル、先是金王長田父子ヲ殺サ
ント欲シ果サス、數人ヲ殺シテ逃ル、○義平飛彈ニ往ク
來リ屬スル者甚タ多シ、義朝ノ死ヲ聞テ皆散テ、義平乃
チ微服シテ京ニ入り、清盛ヲ伺フ、遂ニ捕ヘラル、義平刑
ニ臨テ平氏ノ第ヲ睨シテ曰、保元ノ亂ニ、斬ニ處スル者
ハ夜ヲ以テス、今白昼我ヲ斬ル、奴輩何ソ慘酷ナル、我レ
必ス汝ニ報セント死スル時年二十、○二月、源賴朝ヲ伊
豆ニ派ス、賴朝ノ東ニ走ル、近江ノ鏡驛ニ至リ、大雪ニ逢

ヒ遂ニ義朝ト相失ス、已ニシテ平宗清カ為ニ捕ヘラル、
六波羅ニ送ラル、清盛之ヲ宗清カ家ニ拘ス、宗清憐テ厚
ク之ヲ遇ス、密カニ謂テ曰、郎君死ヲ免レント欲スルカ、
賴朝曰、父兄皆死ス、願クハ僧ト為テ冥福ヲ修メント、宗
清乃チ清盛ノ後母池尼ニ詣リ、賴朝ノ容止故ノ右馬助
ニ肖タルヲ言フ、右馬助家盛ハ、尼ノ所生早ク死ス、池
尼悲傷ニ堪ヘス、重盛ヲシテ其死ヲ宥サン、トテ請ハシ
ム、清盛聽カス、請フ、再三遂ニ之ヲ赦シ、伊豆蛭島ニ派
ス、時ニ年十四、道傍觀ル者ソノ風彩非常ナルヲ見テ相
語テ曰、是レ虎ヲ野ニ放ツナリト、賴朝ノ弟藤原範秀ニ

養ハル、者、範頼ト曰フ平氏之ヲ問ハス、猶三弟アリ、今若シ若牛若皆義朝ノ婢常盤ノ所生ナリ、清盛常盤ノ殊色ヲ悦テ之ヲ納レ、三子ヲ釋ル、今若シ若皆僧ト為ル、牛若二歳鞍馬山ノ寺ニ入ル、後千源義経ト曰フ、○三月、藤原經宗ヲ阿波ニ藤原惟方ヲ長門ニ流ス、經宗ハ帝ノ舅ニシテ惟方ハ帝ノ乳母ノ子ナリ、二人勢ヲ恃テ權ヲ弄ス、嘗テ曰、陛下政ヲ親ラスヘシ、上皇ヲシテ知ラシム可ラス、上皇聞テ大ニ怒リ、清盛ニ救シテ二人ヲ收シム、清盛之ヲ殺ント欲ス、關白忠通請フテ死ヲ減シ、遂ニ流ニ處ス、清盛是ヨリ威福ヲ擅ニスルヲ得タリ、○八月、

太政大臣伊通朝綱ノ廢弛ヲ憂ヘ、上躡シテ三事ヲ言フ、皆時弊ニ切ナリ、○長寛二年八月、崇徳上皇讚岐ニ崩ス、壽四十六、上皇遷所ニ在リ窮居無聊、血ヲ刺シテ大乗經ヲ書シ、三年ニシテ成ル、之ヲ京師ノ安樂壽院ニ藏シ、ヲ請フ、後白河法皇許サス、上皇大ニ恚リ、舌ヲ齧テ血ヲ出シ、每軸ニ唇シテ曰、願クハ大魔王ト為テ天下ヲ悩亂セン、五部ノ大乘經ヲ以テ惡道ニ廻向スト、是ヨリ髮ヲ削ラス、爪ヲ剪ラス、瞋目慘悴シテ崩ス、爾後逆亂止マス、世以テ其崇ト為ス、敕シテ廟ヲ春日河原ニ建テ粟田宮ト曰フ、每歲之ヲ奉祀ス、○永萬元年、六月帝不豫ナリ、位

ヲ皇太子ニ禪ル、尋テ七月廿八日崩ス、壽二十三、

國史攬要卷之三

